

### <一冊の本>表本『申楽談儀』（岩波文庫）

伊藤, 正義 / イトウ, マサヨシ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

57

(開始ページ / Start Page)

124

(終了ページ / End Page)

125

(発行年 / Year)

1998-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020004>

へ一冊の本

表本『申楽談儀』（岩波文庫）

表章氏の多くの著作の中から一冊の本を選ぶのはむつかしい。能楽研究のほとんど全領域にわたって最先端を走り続けてきた表さんの仕事は、たとえば研究の始発点からの論文を集成しつつある『能楽史新考』（一・二）から最新の『喜多流の成立と展開』まで、どれをとりあげても表氏個人を超えた研究史を語ることになるだろう。あるいは、私個人の懐旧につながる言えば、野上記念法政大学能楽研究所『蔵書目録附解題』がある。昭和二九年、表さんの助手時代の仕事であるが、当時能楽研究を志す者にとつて、研究所の存在は新鮮な驚きであったし、目録は書誌のみにとどまらぬ先例のない

伊藤 正義

詳細な文献解題となっていて、初学の眼を開かしたものである。表さんにとつては、これが原点となつて、以後に宝山寺金春家旧伝文書（般若窟文庫）、観世宗家文書（観世文庫）、鴻山文庫、肥後中村家文書、観世新九郎家文書等々の新資料発掘やその調査報告にかかわり、なかんずく大著『鴻山文庫本の研究―謡本之部』は謡本研究の根本となつている。それからも窺えるように、能楽文献の網羅的にして徹底的な調査研究が、表さんの能楽研究の根底をなしているのだが、能楽史研究、謡曲研究とともに、能楽論研究もまたそのような姿勢からの例外ではなかつた。というより、表さんが最も早く着

手した課題のひとつだったのだが、その意味で今一冊の本をとりあげようとするにあたって、ただちに思い当たるのは岩波文庫のいわゆる表本『申楽談儀』（昭和三五年四月）である。

今から思えば隔世の感を禁じ得ないが、私どもの学生時代と言えば、昭和二十年代の世阿弥伝書の基本資料は、能勢朝次『世阿弥十六部集評釈 上下』と、川瀬一馬『頭註世阿弥二十三部集』に頼るだけであり、影印複製は戦前の『花修』『五音』関係のほか、金春本の「世阿弥眞蹟伝書複製集」があつて『世阿弥自筆伝書集』と併用することはできた。能楽関係の雑誌類は大学や公共の図書館にはなかつたから、その所在を捜すだけでも苦労だった。まして関連文献を組織的に研究できる状況はなかつたから、能楽研究所の存在は今誰しもが思い浮かべる以上の意義を担つて出発していたのである。さらに昭和二十年代の終わりから三十年代の始めの頃は、それまで門外不出だった能楽資料がようやく公開に向かう時代の転換期でもあつた。観世宗家文書の総合調査に始まつて、生駒宝山寺の金春家

旧伝文書の全貌が明かになり、金春宗家の世阿弥・禅竹伝書の新発見があった。能楽研究の新たな環境が整えられつつあったのである。

この時にあたって、そのすべてに関わりつつ、表さんの主たる研究課題は「申楽談儀」にあった。「申楽談儀」は伝本に善本がなく、意味不明の箇所を多く含んだまま基準の曖昧な校訂本文で読まれているといった状態であった。表さんは諸本調査を基底に復元的本文制定を企図したのだが、その過程で、戦前「謡曲界」に「談儀愚注」を連載して鋭利な読みを開陳していた香西精氏を尋ね当てることになる。今も知る人ぞ知る、両者の出会いが個人のレベルにとどまらず、能楽研究全般の進展と活性化に大きく寄与したことの具体相は、月曜会雑誌「能 研究と評論」に九六通の「往復書簡」が連載されて詳しく窺うことができる。昭和三年五月の初対面において「申楽談儀」が話題になっているのだが、それ以後、表さんの仕事への香西さんの助言が「多くは手紙とは別のノートの形や校正刷への加筆の形でなされている」ことや、両

者がお互いに刺激し合い、影響し合いつつ研究が深められていったことなどが、往復書簡の「編者あとがき」で回想されている。ともあれ表本『申楽談儀』は、はやく能楽研究所の事業として計画されていた「世阿弥事典」へつなぐものであったらしいのだが、昭和三年一月頃に文庫としての出版が具体化し、昭和三年四月五日の刊行となった。それを神戸の香西さんの許へ持参した直後の一日付書簡には「小著ではあっても、わたしの若い頃を記念する本です」、「いいものに取りつき、いい人の助力を得たものと、しみじみと自分の幸福を思い味わっています」と言い送っている。難物の本を基礎研究からはじめて、丸ごと自分の腕をふるった感慨を率直に吐露しているが、同時にこれを手にしたわれわれ読者にとって、「申楽談儀」の世界が一変した驚きと、伝書研究に新たな紀元が開かれた感動を覚えたのであった。

表本『申楽談儀』が進行していた頃、それと並行して、古典大系『謡曲集』・岩波文庫『風姿花伝』・『舞正語磨』・『天正狂言本』等が手掛けられてもいるのだが、

同時にその間を縫って各地各所の文献を訪ね、調査整理を積み重ねてきた。それらはその時々々の成果に反映しているのだが、つまるところ能楽研究所の充実発展につながっていることがひととき重要である。能楽研究の多くの俊秀たちがここを介して育てられ、多面的な領域が拓かれ深められつつある。一方、表本『申楽談儀』以後およそ二十年を閲して、「世阿弥事典」の本文編・注解編としての意味合いをもった思想大系『世阿弥 禅竹』が成る。それからさらに二十年たった今、振り返ってその間の世阿弥能楽論研究の停滞を思わざるを得ない。世阿弥伝書はすでに読み尽くされたわけではない。往時にくらべて格段に利用に便宜のある現今、研究を志す者は、自らの校本作成という基礎作業からはじめて、自らの読みを徹底するところから、新たな課題も展望も開けるであろう。表本『申楽談儀』はそのことを教えているのである。

(いとうまさよし・神戸女子大学教授)